古典学習指導のとりくみ

―伊勢物語　二四段〝梓弓〟の場合―

伊東武雄

一

高校生がすきな古典として挙げているものに伊勢物語がある。伊勢物語は愛情の書であり、そこには男女の愛を中心にさまざまな愛の世界が物語られているからであろう。中でも男と女の愛の悲劇をとり扱った第二四段〝梓弓〟によるインパクトは強い。多くの生徒は、この作品を通してそれぞれ、愛についての思いを深めている。

わたくし自身も、二四段〝梓弓〟に接して、深い感動を覚えた。大学二年の冬（'53・昭28）、清水文雄先生の名著『女流日記』（文芸文化叢書6・昭15・子文書房）でこの作品を知り、古典のすばらしさに感動した。それは衝撃と言ってよかった。以後、池田勉先生『伊勢物語』（成城文芸読本Ⅱ5・昭25）、松尾聰博士の鑑賞（アテネ文庫261『伊勢物語』、昭和30）や、新井無二郎氏『評釋伊勢物語大成』（代々木書院・昭6）・窪田空穂著『伊勢物語評釋』（東京堂・昭和30）・竹岡正夫博士『伊勢物語全評釋』（右文書院・昭62）などの諸説に導かれて次のような読みとりをして、授業を展開している。

二

昔、男が片田舎に住んでいた。単なる田舎ではない。「都に遠き田舎。偏鄙な地」（注一）であり、「京より遙かに遠い地方」（注二）であった。（注三）交通も不便で、文をことづけることもままならない田舎であった。男は、経済的に不如意になったためか、一旗あげるためか、あるいは宮中警護の徴用によるためか、何らかのよんどころのない事情があって、妻に心を残し「別れを惜しみて」宮仕えに上京して行った。二人には深い愛情に支えられた睦まじい生活があった。男は後髪をひかれる思いで出立したのであろう。

女は夫の帰りを待ち続けた。しかし三年経っても夫からの消息はない。当時の法律では、夫が妻の許を去って三年

帰って来ないときには、妻の再婚が許されていた。(注四)待つことの三年という歳月は、心理的には実際以上に長い。女は、夫は帰って来ないのではないかという不安にかられたことであろう。体調をわるくしているのではないかという心配や、ひょっとすると他の女と暮らしているのではないかという不信の念も生じたことであろう。「待ちわびたりけるに」はその事情を示す。女は、失意・失望・困惑・悲嘆にたえながら、夫の帰りをひたすらに待ち続けていたことであろう。経済的にも生活は苦しくなっていったことも想像される。

そこへ、物心ともに誠意を尽くしてくれる第二の男が出現する。情愛こまやかで親切な男に、丁重に求婚された女は、夫はもはや帰らぬものと心を決め〝今宵結婚いたしましょう〟と約束する。ちょうどその日に、夫が突然帰ってきたのである。

男は「この戸開けたまへ」と戸をたたく。妻への敬語には、夫のやさしい人柄と三年間も消息をしなかった遠慮の気持ちが読みとられよう。(注五)新しい男と結婚の約束をしたからには、夫の突然の帰宅に驚きながらも女は戸を開けることはもちろん、会話もできず、次の和歌をさし出す以外に方法はなかった。この間の緊迫した状況を、これまで単に事件を述べるだけであった物語作者は、「和歌をなむよみて出したりける」と係結び表現によって、読者に直接に解説する。(注六)

あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ

「あらたまの」は年の枕詞。女は、三年もの長い間、つらい思いで待ち続けていたのですと、まず上の句で訴えている。そして、「ただ今宵こそ」と「今宵」を上から「ただ」で強め、下に他を排除する強めの係助詞「こそ」を用いて「新枕すれ」と已然形で結んでいる。「今宵こそ新枕すれ」と「今宵ぞ新枕する」とは同じ強調の係結び表現であっても、強めの度合は違う。「ぞ」を用いた場合には、新枕する日がいくつかあるけれども、たまたま今宵がその日なのですということになり、この場にふさわしい表現ではない。「こそ」を用いてはじめて、新しい夫と生活をはじめるのは、他の日ではない、三年たった今夜なのです。どうしてきのうにでも帰ってきてくださらなかったのですかという限りない無念さ、困惑さがこめられることになる。女が「恨み・嘆き・訴え・惑いなどの混乱の中にいる」(注七)ことが理解できるのである。

事情を察した男は驚いたことであろうが、こういう結末になったのも、自分が妻に消息できなかったことにあると判断したからであろう。次の歌を妻に与え、妻の幸せを願って立ち去ろうとする。

梓弓ま弓槻弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ

男は衛士で、弓を身に帯していたのであろうか。(注八)、弓を三つに並べた歌を詠む。「梓弓ま弓槻弓」は、「槻」に「月」をひびかせて年をひき出す序詞になっている。妻の

歌の「年」をふまえて詠まれた返歌である。弓に梓弓・ま弓・槻弓といろいろあるように、喜びも悲しみもともに過ごしてきたが、わたしがおまえをかけがえのない女性として、誠意を尽して愛したように、今度の夫も大切にして幸せに過せよというのである。

女は、夫の「崇高な愛情」(注九)に接した瞬間、かつてこの夫と楽しいときも苦しいときもともに暮らした日々のこと、夫が真心をこめて自分をいつくしんでくれたことが「嵐のように」(注一〇)胸によみがえってくる。女は、夫を引きとめようとして、必死になって次の和歌を詠みかける。

梓弓引けど引かねど昔より心は君に寄りにしものを

「梓弓」は引くの枕詞。あなたが私を思ってくださろうとくださるまいと、昔からずっと私の心はあなたに寄り添っていたのですと、女は夫の深く大きな愛にふれて、夫への自分の愛を改めて確認している。「昔より」「心は」と過去からの自己の心を取り立てて示し、「寄りにしものを」と自然的完了「ぬ」と直接体験の過去(回想)「き」を用いて語りかけている。しかし、男は現在の自分の境遇では妻を幸せにできないと判断したのであろうか、妻への未練をたちきるかのように足早に立ち去っていく。

女は「いとかなしくて」、激情に身をまかせ、夫への燃えるような激しい愛と、それを夫に理解してもらえない悲しみを抱いて、夫を追っていく。「かなし」は、二四段中でただ一つの心情語である。それは、現代語の「悲しい」だけでなく、「いとしく思う」気持ちをも含み持つ。陰影深い古代語である。(注十一)女の胸ははりさけるばかりであったろう。しかし、追いつくことはできず、清水のある所で倒れ伏す。追いかけるうちに傷つき流れていたのであろうか、女はそこにあった岩に指の血で、和歌を書きつけて絶命する。

あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消え果てぬめる

前の和歌で、「心は君に寄りにしものを」と「心」をとりあげているのに対して、この歌では、「わが身」を対象化している。自分はこのように夫を愛しているのに、それと同じように夫には思ってもらえない。そして夫は自分から離れてしまった。その夫をひきとめることができずに、わが身は今まさに消え果ててしまうようですと、今ひとり生命を終えねばならない女性の運命の悲しみを詠みこんでいる。「めり」は「見えあり」のつまって生じた視覚的な推定の助動詞である。「ぞ…める」という係結び表現による強調は、夫をひきとめることのできなかった自己をみつめ、今まさに死んでいこうとする瞬間の思いを、死ぬべきときは他にも考えられるが、今まさにその運命にあることを強く意識したものとみたい。

真実に愛するが故に、行き違いになった愛の悲劇であった。壮絶な愛の物語である。

注一　新井無二郎『許釈伊勢物語大成』309頁。
二　窪田空穂『伊勢物語評釋』(東京堂、昭30) 95頁。
三　新井無二郎『大成』では「三年来ざりければ」の伏線であるとしている。
四　『養老律令』に「…その夫外蕃に没落して、子ありて五年、無くして三年帰らざる時、…改嫁をゆるす」とある。
五　竹岡正夫『伊勢物語全評訳』539頁。
六　注五と同じ。
七　筑摩書房『平安文学選、学習指導の研究』昭58
八　森本茂『伊勢物語全釋』大学堂書店　昭48
九　清水文雄先生　前記『女流日記』233頁、王朝的発想。
一〇　池田勉先生　前記『伊勢物語』68頁
十一　筑摩書房『平安文学選、学習指導の研究』昭58

三

現在、二四段〝梓弓〟は多くの教科書教材として採用されている。前々任校、高陽高校でも一度、本校では'83年以降、六回はとり扱っている。その実践は、拙著『高校古典教育の考究』(渓水社、一九二二)で報告している。(注一)

指導の大要は、次のようになっている。

1、新潮日本古典集成本（渡辺実校注　昭51）によって、傍注及び頭注を利用して詠む。口語訳をさせる。

2、藤原与一先生の読解の三段階法（素材読み・文法読み・表現読み）によって読みを深める。

①素材読み—五W（時・所・人・事件・理由）の角度から作品分析を行なう。内容の整理をする。

②文法読み—係結び法・敬語法・反語法・助動詞助詞の意味用法に注意して読みを深める。

③表現読み—素材読みをふまえて、表現の微妙なニュアンス、登場人物の気持ち、表現のみごとさを味わう。

この読解の三段階法の観点に立って、次のような学習プリントを用意した。

内容
1 時—（　　）
2 所—a（　　）
3 人A（　　）
B（　　）
C（　　）
①別れ惜しみて　深い愛情 ⟶ I宮仕え
経済的な破綻？
待ちわびたりけるに　経済的
待つことのつらさ　精神的
II帰宅
（　　）年
妻は再婚が許されていた
III歌の贈答
②戸をたたく
和歌をさし出す
4 事件
(1)妻の歌
I〜IV

〝ただ今宵こそ新枕すれ〟
↓とまどい困乱・困惑
夫への恨み　（なぜきのうにでも帰って
無念さ　　きてくれなかったのか）
(2)夫の歌　　贈答歌
〝わがせしがごとうるはしみせよ〟
↓妻の幸せを願う大きな愛
広い愛
(3)妻の歌
〝昔より心は君に失すりにしものを〟
↓夫への深い愛を確認
妻の行動
①夫をひきとめる
②夫を追う——→所b（　　）
妻の心情
かなし（悲し　愛し）
(4)妻の辞世の歌　　独詠歌
〝あひ思はで　わが身は今ぞ消え果てぬめる〟
↓愛のゆき違い—運命の悲しみ（　　）の血
愛の悲劇（主題）——Ⅳ女の死
表現　係結びの表現を指摘し分析しよう
①②③

さらに二三段〝筒井筒〟と比較して、次頁のようにまとめた。

3. 鑑賞を深める

前記、池田勉先生『伊勢物語』（成城国文学会　文芸読本Ⅱ5、67頁—68頁）を印刷配付して、生徒の鑑賞に役立たせた。

「これは、ひとりの女性の運命の悲劇と、そのなかに燃えあがる愛情の、はげしい美しさを物語った話です」と書き始められる鑑賞文は、簡潔にして要を得た高校生向きのみごとな文章である。

4. 練習問題を解く。

各種問題集より二四段の問題をさがし出し、プリントして与えた。例えば、次のようなものである。

①日栄社『短期練習伊勢物語』（平2）
②学研『新ベストコース基本問題集国語Ⅰ』（昭63）
③研数書院『短期完成基礎問題集古文』（'87）
④尚文出版『基礎新国語演習古典（古文漢文）』（昭58）
⑤明治書院『大学入試問題総覧古典編』三冊（昭54～）

5. 書く作業を試みる。

'92年度国語Ⅰの授業では、次の一五〇字短作文作業を実施した。

A　23段〝筒井筒〟との比較読み
B　〝わたくしの伊勢物語論〟

二四段を中心に論じているものを、それぞれ三編ずつ紹介する。

伊勢物語二三段と二四段の比較読み（板書）

筒井筒（23段）

無償の愛情

妻の自己犠牲による献身的な愛

純愛の世界

時　昔

所　大和　田舎わたらひ

井のもと

人　男　けるを

この女をこそ得め

強い愛情

＝　女　この男をと思ひつつ

（贈答歌）①（男）筒井つの井筒にかけし

②（女）くらべこし振分け髪も

事件　(1)　愛の成就　あひにけり（結婚）

(2)　新しい通い所　〈経済的破綻〉

（河内の国、高安の郡の女…新しい女）

妻の献身的な愛

夫の安否を気づかう

（独詠歌）風吹けば沖つ白波（序詞）

⇨

かなし（愛）

結果　ハッピーエンド

夫をひきとめる

あづさ弓（24段）

妻の幸せを願う、大きな愛情

夫の深い愛の世界

↓妻の激しい思い

時　昔　けり

所　片田舎

人　夫

＝　別れ惜しみて　深い愛情

妻

ねむごろに言ひける人…新しい男

事件　(1)　夫の宮仕え

←3年

(2)　夫の帰宅

妻への広い深い愛情

妻の幸せを願う

①あらたまの年の三とせを（妻）

（贈答歌）②あづさ弓ま弓槻弓　（夫）

③あづさ弓引けど引かねど（妻）

かなし（悲）（独詠歌）

辞世の歌　あひ思はで

離れぬる人を

結果　悲劇

夫去り妻は絶命

A　23段〝筒井筒〟との比較読み

(a)話の内容はちがっていてもこの二つの作品には美しい愛情が感じられた。二三段は幼なじみの愛を長い間あたためたからこそ無償の愛情となり、二四段の方は、残酷な運命で結ばれはしなかったが、夫の妻への愛情、幸せを願う気持ちが悲劇的にも美しく見えた。それは女の心理があたたかく純粋に書かれているからだと思う。（女）

(b)男をうまくひきとめることができた二三段よりも、好きなのに扉を開けず、去ってしまった男に追いつくことができない二四段の方が私の心を強く引くものがあった。運命のいたずらで結局死んでしまう女。二人仲良くくらして最後に男に見とられて死にたかったにちがいない。梓弓は本当に印象深い話だった。(男)

(c)筒井筒と梓弓を読み比べると、私は梓弓のほうが好きです。結果だけみると、筒井筒はうまくいくけど、梓弓は、男は女のために身を引き、そしてもっと悲しいことに女は死んでしまうという、悲惨な話だけど、お互いの深い愛情が、結ばれなくても、とてもすばらしいと思います。(女)

B　わたくしの伊勢物語論

(a)　九段・二三段・二四段はどれも男と女が愛し合うことが中心になっていたので、感動したりくやしかったりした。やはり二四段の梓弓に一番感動した。終りが悲劇的だったけど、男と女の愛のあり方がとても美しかった。伊勢物語はなかなか気に入った。(女)

(b)　伊勢物語はどれも男女の恋愛のはなしで、すごくよかったが、中でも一番印象に残り、すきなのは梓弓です。どの段にも男性が登場してきたが、梓弓に出てきた男性の心のひろさに心をうたれました。結末は悲劇でおわったけど、これがまた一層心に強く印象づけたのだと思います。(女)

(c)　私がすきなのは梓弓です。悲しい話だったけど、現代にはあまり見ることができないような、美しい愛の話だったと思います。お互い愛しあっていたのに、まさに運命のいたずらでした。二人の静かな悲しい愛が、とても美しくていいなと思いました。(女)

'93一学期の三年文系選択古文でも、伊勢物語をとり扱った。その際も一五〇字感想を求めた。梓弓をとりあげたものには、作品についての感想とともに、登場人物の男と女の愛のあり方について論じたものが多かった。男女それぞれに肯定的な感想ともに、おたがいの愛の深さは認めながらも否定的批判的感想をのべたものが意外に多かった。以下、四つの観点から感想をまとめたい。

A　作品について

①男と女の愛に男女の原点を見るようだ。

②男女の愛がとてもよくあらわれている作品だ。

③たいへん悲しい物語だ。

④日本人の美学がそのまま出ているような話だ。男の美談としてとらえたい。
⑤これは純愛ではない。女は男の帰りを待つ。男は愛をもって女をとりもどす。これが純愛だ。

B　女（妻）について
①女の愛情の深さに圧倒される。女の男に対する深い愛情が伝わってくる。
②夫と新しい男の板ばさみに苦しむ女の愛情、悲しみがしみじみと伝わってくる。
③なんの音沙汰もない男を三年間も待ち続けたことはすごい事だ。(2)
④女はもう少し待ってほしかった。わたしが妻なら待ちたい。女の弱さが出てしまって最後まで男を待つことができなかったのが残念です。どうしてあと一日待てなかったのか。三年目に男が帰ってくる可能性はあったのに。
⑤女の行動はしょうがない。愛する人を待てなかったこの女性に同情する。三年間待ち続けた女のつらさがわかる。
⑥内に熱い愛情を秘めた女だ。一人の男を死ぬほど愛するということは、今の私には考えられない。

C　男（夫）について
①女を大切に思う男の言葉に涙が出た。昔の男尊女卑の考えの中ではすばらしい人間だ。
②男が三年間も帰ってこなかったことは事情があるにせよひどすぎる。なぜ三年間も連絡しなかったのか。それがお互いの不幸の原因となったのだ。
③男のやさしさも伝わってくるが、自分のところへ「戻ってこい」と言ってほしかった。男はもうちょっと未練を残してもよいのではないか。
④男はもっと強引であってほしかった。優しいことばをかけられるより、女は無理にでも連れ出されたかっただろう。男はあっさりあきらめず、この女をうばうぐらいの気持ちの方が、女はうれしかったであろう。男は争うことになっても家の中に入るべきだ。
⑤自分を慕ってくれていた女をあっさり手放す男は、事情があるにせよ、情ない。第三者の目に、男らしいわねぇの言葉を気にした言動に出たとしか思えない。まだ結婚していない女をさっさと諦めた男！本当にお前は愛していたのか！男には他に女がいたにちがいない。

D　その他
①二人が結ばれなかったのがとても残念だ。
②あまりにもひどい運命のいたずらに、女も男もあはれだ。
③女が血文で石に歌を記して力尽きて死んでいくところが壮絶だった。
④男の歌は憤りを押さえた恨み事であろう。
一年生の感想の多くは、夫の妻を思う広く大きい愛に感

動し、女の悲劇的な運命に強い感銘を覚えている。これに対して、三年生の感想では、夫を待ち通せなかった女を批判し、男はもっと積極的な行動に出るべきだとする意見が意外に多かった。

四

二四段〝梓弓〟は、想像の翼を広げて読むことのできるフィクションの物語である。愛の真実がみごとな虚構で語られている。(注二) 四首の和歌を中軸にすえて、事件のみが簡潔に語られた作品であり、登場人物や主題などについてのさまざまな読みが可能である。諸説・異論も多い。登場する男女についても従来多くの意見が出されている。

例えば、男が立ち去った理由として

a. 妻への恨み (大成310頁・全書—注三)

b. 夫の失望と憤り (評釈95頁)

c. みやびの精神を貫くため (注四)

などとするのはどうであろうか。やはり「未練を残しつつも去らねばならないと判断した男が、後悔をたたえた自己説得を女への祝福の形で歌った」(前掲新潮古典集成42頁)ととることによって、男の深い大きな愛情が理解できるのである。自己の悲しみを抑えて妻の新しい幸せを願うことのできる男の人間像が浮びあがってくるのである。

女に対しても否定的な意見も多い。『全評釈』のように「心根の浅い女性」(545頁) ときめつけてしまうのはどうであろうか。この作品もまた「女の純愛の物語」(注五)、「ひとりの女性の運命の悲劇とそのなかに燃えあがる愛情のはげしい美しさを物語った話」(前掲・池田勉先生『伊勢物語』) とみたい。

これからの学習に当っては、読解の三段階法を基盤にして深く豊かに読みとらせるとともに、想像の翼を広げて読ませることをさせたい。そのために、まず次の五点をグループで話しあいをさせたい。

①男はなぜ三年間もたよりを出さなかったのであろうか。

②女はなぜ再婚の決意をしたのだろうか。

③男はなぜ立ち去ったのだろうか。

④この男をどう思うか。

⑤この女をどう思うか。

話しあいをふまえて、二四段を創作風に書き上げることを試みさせたい。伊勢物語の二四段梓弓の創作法を実践したい。(注六)

追記　本稿は、「河　26号—清水文雄先生卒寿記念特集」(王朝文学の会・平成五・六) の原稿に基いて二七会 ('93・7・18於青少年センター) で発表した資料をまとめたものである。

注一　拙著『高校古典教育の考究』所収の伊勢物語学習指導の論考は次のものである。
第一章　二　文法読みの実践
㈠　伊勢物語（23・24・9段）のばあい
第五章　比較読みの試み
－伊勢物語23・24段の受容の実態を中心に－
第七章　古典鑑賞指導の試み
－伊勢物語の学習指導の場合－

注二　前掲　筑摩書房『平安文学選学習指導の研究』

注三　南波浩『伊勢物語』日本古典全書、朝日新聞社昭35

注四　野口元大『古代物語の構造』　有精堂　昭和44

注五　片桐洋一『伊勢物語』鑑賞日本古典文学5　角川書店　昭50

注六　〝梓弓〟の物語化の実践として
江藤結花教諭〝古典に親しませる学習指導の試み
－『伊勢物語』の実践－〟
（'93・8・11　第34回広島大学教育学部国語教育学会）がある。

'93・8・25　記

（広島県立安古市高等学校）